

《研究ノート》

トゥメド左旗の文化大革命に関する一考察 — バグシ人民公社サーリチン大隊の事例 —

阿日查(アルチャ)

はじめに

文化大革命中(以下は文革と略す)、中国の北部に位置する内モンゴル自治区において、モンゴル人の、少なくとも346,000人が逮捕され、27,900人が殺され、120,000人に身体障害が残った(郝維民、1991:313-314)。以上の統計から見ると当時、自治区内のモンゴル人人口は150万弱だったので、およそ、四分の一の人々が「民族分裂主義者」として逮捕され、そのうちおよそ10%が殺害に遭ったことになる。同事件の規模と深刻さから見ても、「中国全体の中で最大規模の集団的冤罪事件」(図們 祝東力1995:1)と言われる。

また同事件は、「最初から最後まで民族問題を軸とした民族間紛争のかたちで行われ」(阿拉騰徳力海、1999:2)、「中共の民族政策によって緩和傾向にあった、内モンゴル自治区に存在する少数民族と漢民との間の対立が」(啓之、2010:18)、「文革を経て、さらに深刻化されてしまった」(同上:577)、と見られている。

以上は中国国内における、内モンゴルの文革に関する主な見解である。そもそも文革については、1980年代から90年代にかけて中国内地の大都市部を中心に、嚴家其と高皋、王年一らが歴史的な視点から研究を行なったが¹、1990年代から現代に至るまでの研究は、社会、思想、記憶などの多分野に渡っている²。これに比べて、少数民族地域の内モンゴルの文革に関する研究は、上で示した範囲内に留まり、阿拉騰徳力海とトゥメン、祝東力らの著書はすでに中国国内では禁書のリストに加えられている。中国において、少数民族地域で行われた文革に関する研究は未だにタブーなのである。

他方、日本においては、内モンゴルの文革について、「この事件は実はウランフーなど

¹ 嚴家其、高皋(1986)『文化大革命十年史』天津人民出版社。王年一(1988)『大動乱的年代』河南人民出版社。

² 文津(1992)『中国左禍』北京朝華出版社。張化、蘇采青主編(1994)『回首“文革”—中国十年文革分析與思考』(上、下)中共党史出版社。金春明、席宣(1996)『文化大革命簡史』中共党史出版社。宋永毅、孫大進(1997)『文化大革命和它的異端思潮』田園書屋(香港)。周倫佐(2011)『「文革」造反派真相』田園書屋(香港)。季羨林(2011)『牛棚雜憶』武漢出版社。韋君宜(2012)『思痛錄』人民文学出版社。最近日本においては福岡愛子の研究が注目を集めている。福岡愛子(2008)『文化大革命の記憶と忘却—回想録の出版にみる記憶の個人化と共同化』新曜社。福岡愛子(2014)『日本人の文革認識—歴史的轉換をめぐる〈翻身〉』新曜社。

実権派から権力を奪い取ろうとした権力闘争であって」(毛里、1998:116)、「内モンゴルにおける政治指導体制の変更の契機になった」(星野、2003:325)、などの分析がある。最近になって、文化人類学者の楊海英は、多数のモンゴル人が犠牲になった内モンゴルの文革は、「中国共産党と中国人主導のジェノサイドである」(楊海英、2009b:6)と主張し、膨大な資料集を編集、公開している³。

文革当時、中国共産党政府主導の下で、「革命的な群衆」と自称する漢人(紅衛兵、労働者、幹部)たちは、「民族分裂主義者」とされたモンゴル人に対して、長期間に渡り拷問や自白を強要し、好き勝手に刑罰や処刑を行った。被害者は自治区のエリート層を始め、一般民衆に至るまで多くのモンゴル人が巻き込まれたのである。これらの点は、以上で示した諸研究によって既に明らかになっている。すなわち、内モンゴル文革運動のアウトラインがほぼ見えてきたのである。

しかし、社会全般において、文革運動はどのように展開して行ったのか。当時において、社会の中心部とその周辺の間にはどのような関係があったのか。具体的に言えば、都市部と農村地域における文革運動はどのようなつながりを持っていたのか。農村地域間の繋がりはどのようなものだったのか。この問題点はいまだにほとんど検討されないままである。そこで、本稿では文革のそのような実態を再検討するために、社会の末端組織である、当時の人民公社下屬の生産大隊⁴における文革運動を事例に、ミクロな視点において内モンゴルの文革運動を考察する。

本稿の舞台となるのは、モンゴル人と漢人の混住地域、内モンゴルの帰化城トゥメド左旗⁵に属するバグシ人民公社サーリチン生産大隊である。トゥメド地域は漢人の移住者が多く、漢文化による同化が進み、モンゴル人のほとんどが自分の言葉を話すことが出来ず、漢語を話すようになっていた。本稿の主人公である榮孝忠(Rong Xiaozhong)もそのような一人だった。榮(雲とも書く)とは、トゥメド地域に住むモンゴル人の特有の名字で、モ

³ 楊海英は長年に渡り内モンゴル自治区の文革に関する公文書、経験者個人の保存書類、当時の新聞や壁新聞(大字報)、ビラなどの一次資料を集めて、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料』のシリーズを編集し、今まで9冊を出版している。これらは、内モンゴル自治区ないし中国全体の文革研究においても貴重な一次資料である。

⁴ 農村人民公社は一般に、公社、生産大隊、生産隊の三級に分ける。公社は経済上、各生産大隊の連合組織で、生産大隊は基本経済計算組織である(毛里和子、国分良成著『原典中国現代史-政治(第1巻)』岩波書店1994:197)。

⁵ 旗は清朝時代から使われたモンゴル特有の行政単位で、中国内地の県に相当し、いくつかの旗を管轄するのは盟になる。トゥメド左旗は現在の内モンゴル自治区首府フフホト市の西側にあるトゥメド川平原に位置する。文革期の1969年に左、右両旗に分けられた(土黙特左旗『土黙特誌』編纂委員会編『土黙特旗誌』内蒙古人民出版社1987:52)。本稿では1969年以降に形成されたトゥメド左旗の範囲を指す。

ンゴル部族名Yöngsiyebüの頭文字Yöngを姓として採用した当て字である。

本稿では、主に「栄孝忠の档案—材料登記」(栄孝忠の身上調査1967年～1969年)を使用する。モンゴル人の栄孝忠が文革中に「民族分裂主義者」として批判され、長期間に渡って強制的な自白を強いられた際の調査を分析し、基層における文革運動の展開と迫害の実態について検討する。なお、当史料は中国語で書かれたものであり、楊海英と阿日晷によって公開されている(楊、阿日晷、2013:21-130)。

1. 背景—ウラーンフーの失脚とトゥメド左旗モンゴル人の抵抗

1966年5月、共産党華北局⁶の「前門飯店会議」⁷が北京で開かれた。この会議上、内モンゴル自治区の党、政、軍の実権を握っていた最高指導者のウラーンフー⁸が失脚した。華北局が「前門飯店会議」後の1966年7月27日に起草した「ウラーンフーの誤り問題に関する報告書」には、「ウラーンフーが犯した誤り」について以下のような記事がある。

ウラーンフーの誤りは反党、反社会主義、反毛沢東思想の誤りであり、祖国の統一を破壊し、独立王国を作った民族分裂主義、修正主義の誤りである。実質上は内モンゴル党組織において最大のブルジョア路線を歩む実権派である。また、内モンゴル自治区は祖国の辺境で、反修正主義の前線であり、戦略要地である。ウラーンフーの間違ひは、祖国の辺境を固めることと、民族の大団結、または内モンゴル自治区における社会主義革命および社会主義建設にきわめて嚴重な損失を与え、その毒の根を深く下ろしていることである(楊海英、2011a: 209-223)。

引用文が示すように、ウラーンフーは、「反党、反社会主義、反毛沢東思想」と、「祖国の統一を破壊し、民族分裂活動を行い、独立王国を作った」との罪が着せられたのである。

1966年8月に、中国共産党中央の第十一回中央委員会総会が開かれ、文革を実行する綱領的な公文書である「十六条」が可決された。その後間もなく、毛沢東と共産党中央の呼びかけおよび内モンゴル自治区党委員会の指導の下で、紅衛兵と労働者が中心となって、内

⁶ 北京、天津、河北省、山西省、内モンゴル自治区を管轄する。

⁷ 前門飯店会議に関する第一次資料は楊海英編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料(3)—打倒ウラーンフー』(2011)に収録されている。

⁸ ウラーンフー(1906～88)、別名雲澤。コミンテルンの指示でソ連留学を経て共産党の延安に入る。中華人民共和国成立後に内モンゴル自治区人民政府主席、中国共産党内モンゴル自治区委員会書記、内モンゴル軍区司令官兼政治委員、中国共産党華北局副書記、國務院副總理などを歴任(楊海英著『中国とモンゴルのはざま—ウラーンフーの実らなかった民族自決の夢』岩波書店2013:V)。

モンゴル文革の第一段階に当たる「ウラーンフー反党叛国集団」（1966年後半～1968年初）を批判する運動をスタートさせた⁹。最初の批判対象となったのは、ウラーンフーの腹心たる部下で、彼によって自治区の政府機関に配置され、指導権を握るモンゴル人幹部たちだった。当然、ウラーンフーの故郷であるトゥメド左旗は「民族分裂を行う拠点」とされ、彼と同郷のトゥメド左旗出身の幹部たちも矢面に立たされ、次々と失脚した。

こうした背景から、トゥメド地域において一般民衆のレベルでは、「革命的な群衆」として自称する漢人農民たちも、「民族分裂主義者集団」のボスとその家来とされたトゥメド左旗のモンゴル人を批判する運動を広げた。彼らは、モンゴル人の家を検索し、モンゴル人の家畜や農地を略奪した（啓之、2010:140）。そして、「ウラーンフーが独立王国を作ろうとしている」という流言蜚語を拡大させた（啓之、2010:139）。

ウラーンフーは民族を分裂させ、モンゴル国と合併し、大モンゴル帝国を建立しようとしている。モンゴル民族の人々に軍刀を準備させ、漢民族の人々が従わない場合、漢人を皆殺しにしようとしている。1967年5月1日は、内モンゴル自治区成立20周年で、中央の無防備に乗じてクーデターを起こそうとしている。後山、河套、フフホト市近郊などの地域で、処刑所をいくつか作ってある。

漢人の間で流れる噂とは対照的に、モンゴル人の間にも騒動が広がった（楊、2011a:892）。

文革運動はもっぱらトゥメド左旗のモンゴル人をやっつけようとしている。漢人たちは、東部のモンゴル人と連合して、西部のモンゴル人を肅清する。西部モンゴル人の自留地と馬が没収され、モンゴル人は皆草地に逃げ込んだ。漢人はモンゴル人を皆殺しにしようとしている。

漢人からの批判に抵抗して、1966年12月23日に、トゥメド地域のモンゴル人紅衛兵と農民たちが連携した造反組織—「^{レエンシエ}聯社」（内モンゴル東方紅革命造反聯社の略）を結成した。農民の李占標（Li Zhanbiao）がリーダーで、「ウラーンフーの死党」として批判された

⁹ 啓之は、内モンゴル文革の「主体」は1966年5月から1969年5月までの間に行われた、「ウラーンフー反党叛国集団」を批判する運動、紅衛兵の派閥闘争と「ウラーンフーの黒いラインを抉り出し、肅清する」運動からなる、と分析する（啓之著『内蒙文革實録—〈民族分裂〉與〈挖肅〉運動』天行健出版社、2010:21）。しかし、「紅衛兵の派閥闘争」も「ウラーンフー反党叛国集団」を批判する運動めぐって行われたことで、本稿では、「ウラーンフー反党叛国集団」を批判する運動を内モンゴルの文革の第一段階、「ウラーンフーの黒いラインを抉り出し、肅清する」運動を第二段階と見る。

内モンゴル民族委員会弁公室副主任の雲善祥(Yun Shanxiang)、水利庁副庁長李永年(Li Yongnian)、趙維新(Zhao Weixin)らがその後ろ盾になって(高樹華、2007:334)、組織的な活動を広げた。しかし、1964年の時点で、トゥメド左旗においてモンゴル人人口19,719人に対して、漢人人口は407,019人になっていた(土黙特左旗『土黙特誌』編纂委員会、1987:839)。漢人人口はモンゴル人人口の二十倍にも達し、モンゴル人は人口の面においても、不利な状況に立たされていたのである。

「聯社」は、「ウラーンフーには誤りがない。これは大漢民族主義による迫害だ」、「漢人には革命をやることができるなら、我々モンゴル人にも革命を行う権利がある。ウラーンフーが悪かったとしても、すべてのモンゴル人が悪人とは限らない。ウラーンフーの失脚について、トゥメド旗のモンゴル人たちはかなりの圧力を感じている」、「ウラーンフーと雲麗文(Yun Liwen、ウラーンフーの夫人—筆者)は良い人で、モンゴル人に対して良いことをたくさんやってくれた。我々は忘れてはならない。我々の運命はお互いに繋がっているため、彼が打倒されたら我々モンゴル人もおしまいだ」(楊、2011a:892-895)と主張した。彼らはウラーンフーの無実を訴え、モンゴル人の権利を守ろうと呼びかけたのである。

このように、文革初期において、「聯社」はトゥメド左旗とフフホト地域を中心に活動を広げ、ウラーンフーを批判する政府機関の権力者をはじめ、紅衛兵や漢人労働者と対立していた。そして、「聯社」の勢力はトゥメド左旗の農村地域まで及んだ。

2. 文書史料が語るサーリチン大隊の文革

2.1. 発端—「万家溝菓園事件」

文革がスタートして1966年末になると、トゥメド左旗において、「ウラーンフー反党叛国集団」への批判とそれに抵抗する動きは、末端の農村にまで及ぶようになる。

自治区の首府フフホト市の西に位置するトゥメド左旗にバグシ(モンゴル語の「教師」の意)という人民公社があった。その下に、サーリチン村(モンゴル語の「牛の乳を搾る人」の意)という、地理的に言えば東から西へ西梁^{シーリヤン}、サーリチン、窩子湾^{ヨウスワン}という三つの農村からなる生産大隊があった。『土黙特誌』によると、1961年の時点では、大隊の人口は361戸、1,390人であった。西梁と窩子湾は漢人の村で、サーリチン村は194人の人口を持つモンゴル人の村だった(土黙特左旗『土黙特誌』編纂委員会、1987:130)。

文書によれば、1966年12月、サーリチン小学校の校長を務めていた榮孝忠¹⁰と教師の

¹⁰ 榮孝忠は1935年11月に、トゥメド左旗チャーソチ郷に生まれた。1959年10月に24才で北京中央民族学院附属高校を卒業した後、1960年9月まで、ウラーンチャブ盟チャハル右翼中旗中学校で教師を務めた。その後、故郷に戻り二年間の間工場や農場で働き、62から65年8月までチャーソチ郷内の小学校で教えた。65年9月から文革中に打倒されるまで、サーリチン小学校で校長を務めていた(楊、阿日查、2013:106-107)。

栗培英 (Li Peiyang)、それに大隊の党委員会書記の趙永清 (Zhao Yongqing) らが「文革準備委員会」(後に、「サーリチン大隊紅色革命造反聯合総部」となる)を組織した。榮孝忠は「準備委員会」の副議長を担当した。榮はまた学校内において、モンゴル人の李政秀 (Li Zhengxiu) と雲威風 (Yun Weifeng) らとともに「紅心戦闘隊」(以下は「紅心」と略す) 一後に「聯社」の支部組織となる一という組織を作り、学校内においても文革を推進しようとした。

また、サーリチン大隊にはもう一つ、「東風戦闘隊」(以下は「東風」と略す) という西梁と窑子湾の漢人中心の大衆組織があった。そのメンバーに、大隊会計係の栗留在 (Li Liuzai、西梁村)、婦聯議長の李平女 (Li Pingnv)、宋国亮 (Song Guoliang) らがいた。

最初は「紅心」と「東風」の両組織の間には対立が見られず、菓園の「万家溝菓園毛沢東思想を守る戦闘隊」と、それにバグシ人民公社の「バグシ公社企業の毛沢東思想を守る戦闘隊」などの組織の間でしばしば「串連」(chuan lian)¹¹して交流をしていた。彼らは、ウランフーが「ウランフー反党叛国集団のボス」だったという政府の断罪に対して失望し、半信半疑で、文革という未曾有の運動をどう進めば良いか、分からない段階にあった。ちょうどその頃、サーリチン大隊から南へ2キロ離れた万家溝菓園(果物農場)ではウランフーへの批判をめぐって、モンゴル人と漢人の間で対立が発生していた。

1966年12月頃に、「紅心」と万家溝菓園のモンゴル人との間で「串連」を行った時、菓園の傑木勝 (Jie Musheng) という女性は榮孝忠に対してこう話した(楊、阿日查、2013:80-81)。

菓園は大した文化大革命をやっていない。本当の走資派は摘み出されていないにもかかわらず、逆に数人の群衆は反革命分子とされてしまった。申才才 (Shen Caicai) は二番目のウランフーの黒い一味¹²とされて巴文科 (Ba Wenke) と一緒に闘争され¹³、殴られてズボンに小便をし、三日間も倒れたままだ。私は女鬼婆とされ、雲満旺 (Yun Manwang)、康福成 (Kang Fucheng)、丁金全 (Ding Jinquan) らも巴文科の一味とされ、

¹¹ 1966年8月18日、毛沢東は天安門の城楼で首都の紅衛兵を接見した。これを受け、遼寧省の紅衛兵一行が徒歩で北京に向かい、毛の顔を仰ごうとした。毛と文革指導小組はこれを「大串連」と称し、全国の紅衛兵の「大串連」を呼びかけたことにより、全国に広がった(張石山著『拷問経典—未来世紀の文革考古索引』秀威資訊科学、2010:158)。また、他地域の紅衛兵との間で交流する目的を持つ。

¹² 中国語は黒幫 (hei bang) という。社会的に悪い影響を持つゴロツキやそのグループのことを言う。文革期は正しいとされたものはすべて「紅」で、その反対に悪いものはすべて「黒」であるとされた。

¹³ 「批判闘争」という。大勢の人間が怒号しスローガンを叫びながら「被告」の罪状を暴き、詰問を繰り返しながらつるし上げること(宋永毅編『毛沢東の文革大虐殺』原書房2006:118)。

批判の大字報を貼られた。我らを闘争したのは王貴仲(Wang Guizhong)、班輝(Ban Hui)、郭占華(Guo Zhanhua)らの人々で、後ろ盾は趙華(Zhao Hua、菓園主任－筆者)だ。

批判闘争された申才才と巴文科は文革の主旨に従って、菓園の権力者を「走資派」と批判したが、逆に権力者側によって、「ウラーンフーの一味」として決め付けられ、暴力を受けたのである。申才才と巴文科はモンゴル人で、王貴仲らは漢人だったことに対して、榮孝忠らは、「菓園では、漢人はモンゴル人をバカにしている」(楊、阿日查、2013:86)と判断した。

榮孝忠は文革が始まる頃から、「ウラーンフーは悪かったとしても、すべてのモンゴル人がその一味であるとは限らない。鋤を担ぐ農民まで肅清しようとするのはどういうことだ。これは大漢民族主義が少数民族を圧迫していることに間違いない」(楊、阿日查、2013:84)と考えていたようだ。このような考えの下で、榮孝忠が率いる「紅心」は闘争された菓園のモンゴル人を庇って、漢人の王貴仲らを批判した。

そして、両派はお互いを壁新聞などで批判し合ううちに対立が激しくなり、サーリチンの女性数人が王貴仲に対して暴力を振るった。檔案の記述によれば、「1966年12月28日に、榮孝忠は20人余りの女性に指示して、王貴仲に対して闘争を行った。女性たちは靴などを使って王貴仲の頭を殴った。王は意識を失い、嘔吐をして失神したが、幸い旗委員会の車で旗内の病院に送ったことで命が助かった」(楊、阿日查、2013:27-28)。

このように、榮孝忠が率いる「紅心」のメンバーが、「ウラーンフーの一味」とされたモンゴル人を保護し、漢人の王貴仲を殴ったことは、「万家溝菓園事件」としてすぐに周りの村々まで伝わった。同事件は後に、「聯社」が引き起こした暴力事件として関連付けられ、「ウラーンフーの名誉回復を目論む反革命的な事件」(啓之、2010:141)として、フフホト市の紅衛兵の批判を受けることになる。

2.2. サーリチン大隊内における派閥対立

「万家溝菓園事件」発生後、サーリチン大隊内では、「紅心」は、「ウラーンフーの一味であるモンゴル人を保護した」として、「東風」に批判されるようになる。さらに、「紅心」の隊員の彭付正(Peng Fuzheng)と栗常在(Li Changzai)、それにモンゴル人の榮恩録(Rong Enlu)が「東風」に移転して、榮孝忠らと対立するようになった。これに対して、榮孝忠は「紅心」を拡大し、村のモンゴル人農民たちをも入れて、「紅岩戦闘隊」という名前で活動するようになり、「紅岩」対「東風」という対立構造が出来上がる。

「紅岩」と「東風」両派の対立が原因で、サーリチン大隊は二回目の「文革準備委員会」の選挙を行った。榮孝忠は委員会の副議長から外され、代わりに漢人の彭付正と栗培英らが

選ばれた。そして、「東風」は大隊の「文革準備委員会」とともにサーリチン大隊の文革を主導するようになる。

サーリチン大隊内において、「東風」と「紅岩」の両派は「四類分子」(地主、富農、反動分子、悪質分子)とされたモンゴル人を批判すべきか保護すべきかをめぐって、対立がさらに深まって行った。以下は、1967年2月27日に「東風」が主催した二回目の「敵を批判する大会」の内容についての記述である(楊、阿日查、2013:37)。

大会には四類分子六人(李小娃、雲毛毛、吉力更、武虎撓、王永永、劉福礼)を呼び出して闘争しようとしたが、四類分子らは、「紅岩の隊員である高文善(Gao Wenshan)の指示がない場合は行かない」と言った。やむを得ず、高文善に指示してもらってからやっと大会に現れたが、榮孝忠は李小娃(Li Xiaowa)の息子である李文計(Li Wenji)と「紅岩」の隊員榮樹成(Rong Shucheng)らを派遣してきて、「この会議は事前の知らせも出さないのはなぜか、これは文革『十六条』に違反している」などと叫び、四類分子を庇護し、会場を混乱させた。

ここで言う「四類分子」はサーリチン村のモンゴル人たちだった。「東風」が「四類分子」とされたモンゴル人を批判したことに対して、「紅岩」はいわゆる妖怪変化の類とされた「四類分子」を保護しようとしたのである。

また、当時の雰囲気伝える場面を、「東風」のメンバーは次のように語る(楊、阿日查、2013:49)。

特に今年(1967年—筆者)の春節頃、榮孝忠の家は派閥の最高司令部になっていた。毎日昼から夜まで、モンゴル人たちが集まり(中に四類分子の息子たちもいた)、秘密会議をしていた。もし、情勢が緊迫した場合、タブンアイル¹⁴に行き行って申連をする計画もしていた。

以上の二つの記述はいずれも「東風」の視点から書かれているものの、1967年の前半まで、サーリチン大隊における民族間の対立は、「万家溝菓園事件」から始まり、「四類分子」とされたモンゴル人を批判するか保護するかをめぐって拡大したことが分かる。社会的な

¹⁴ タブンアイル人民公社。ウラーンフーの生地で、民族間の対立が目立っていた。1967年1月31日、「聯社」のメンバーらが同人民公社でウラーンフーの無実を訴えたことにより、現地の漢人農民たちの暴力を受けたことが、「タブンアイル事件」として有名になった(楊、阿日查、2013:89)。

情勢や人口構造などが原因で、「東風」のメンバーが増えて行くのに対して、一方の「紅岩」は徐々に弱い立場に立たされるようになる。このような状況のなか、榮孝忠らはバグシ村のモンゴル人と連携するようになり、バグシのモンゴル人大衆組織も彼らを応援するようになる。また、榮孝忠は外部からのさらなる支援を受けるために、1967年2月にフフホト市に出かけ、「聯社」に参加したのである。彼は「聯社」のメンバーが腕に付ける腕章をサーリチンに持ち帰って配り、モンゴル人の権利を保護することを訴え続けた。

2.3. 「聯社」のメンバーとしての榮孝忠の活動

1966年末から1967年の初頭にかけて、トゥメド左旗内の各地において、「万家溝菓園事件」のような民族間対立が（「タブンアイル事件」や「鉄帽事件」など）多発していた。そのほとんどが、「聯社がウラーンフーの名誉回復を目論むことによって引き起こされた暴力事件」（楊、2011a:896）として関係付けられた。従って、「聯社」は多くの大衆組織からの批判の標的となる。1967年3月に、フフホト市内において、「聯社」を打倒する大字報やスローガンが町の至る所で貼られた（高樹華、2007:334）。さらに、フフホト市の「紅衛軍」、「工農兵」、「無産者」などの紅衛兵組織が、フフホト市委員会の建物内に置かれた「聯社」の拠点を攻撃して占領した（楊、阿日查、2013:95）。

「聯社」が攻撃されたことを背景に、「紅岩」は「聯社」に参加したとの理由で、バグシ公社幹部の王興東（Wang Xingdong）と「サーリチン大隊文革準備委員会」、それに、大隊の党支部によって反革命的な組織と宣告され、戦闘隊の解散が命じられた。これに対して、榮孝忠らは逆に、「紅岩は反革命的な組織ではない」と主張して譲らなかった。反革命的な組織と宣告された「紅岩」は強硬な行動に乗り出した。1967年4月初めに、「紅岩」のメンバーらは隊長の雲威風の指導の下で、サーリチン大隊の「文革準備委員会」に対して造反し、大隊幹部の趙永清らを連行して批判闘争を行った。また、「紅岩」は大隊の会計係で「東風」のメンバーである栗留在に対しても批判闘争会を開き、栗留在を保護しようとした「東風」の彭付正と宋国亮の二人に対して批判闘争を行った。

「聯社」に参加した上に、大隊の幹部らを批判闘争したことを理由として、1967年4月6日に、バグシ公社からサーリチン村へ、榮孝忠と李政秀を反革命組織の首謀者として逮捕するという情報が伝わった。二人はフフホト市へ逃走し、市内にある師範学院の建物内に避難した。偶然ながらここは、トゥメド左旗の各地域で紅衛兵や漢人農民による迫害を受けた「聯社」のメンバーたちの避難所にもなっていた。ここで話題にされたのは、紅衛兵と漢人農民たちに逮捕された「聯社」のメンバーらが、「吊り上げられて叩かれる」、「肛門に炒めた豆を入れられる」、「馬に引きずらせ走らせる」、などのひどい暴力を受けていることだった。

しかし、これらの避難者たちは再び抵抗の旗を翻し、「聯社新常務委員会」を立ち上げ、栄孝忠はサーリチンを代表して、十一人の常務委員の一人になった。その一方、1967年5月になると、「聯社」がウランフーの無実を訴えたことにより、内モンゴル最大の造反派紅衛兵組織である「呼三司」(フフホト市革命造反紅衛兵司令部の略)によって批判される。「呼三司」はフフホト地域だけではなく、全内モンゴル自治区の紅衛兵組織ないし一般群衆の中においても絶大な影響力を持っていた。その結果、「聯社」は「反革命的な組織」として決め付けられ、リーダーや中心メンバーが逮捕され(啓之、2010:143)、「聯社新常務委員会」も解散させられた。このことにより、栄孝忠は二ヶ月ほどの間フフホト市やトゥメド旗で逃げ隠れた。

その後、彼はサーリチンに戻ってから一方的に批判を受けることになる。バグシ人民公社とサーリチン大隊において、「東風」のメンバーであった彭付正らが中心となって、栄孝忠を批判する大会や小会議が一月以上に渡って開かれ、彼が「聯社」に参加したこと、「ウランフーの黒い一味」とされたモンゴル人を保護したことなどが批判された。

1967年11月になると、栄孝忠はバグシ公社の「毛沢東思想学習班」¹⁵に参加させられた。「学習班」は栄孝忠に対して、「聯社」に参加してウランフーの無実を訴えた過ちを認めるように指示するが、栄孝忠は、「紅岩」の主旨には間違いないと強調し続けた。続いて、1968年2月に、第二回目の「学習班」に参加した時にも、彼は同じ態度を取り、考え方を変えなかった。

3. 摘発と証言および強制的な自白

3.1. 栄孝忠の「罪惡に満ちた歴史」

栄孝忠は「学習班」において思想改造が強いられるなか、内モンゴルの文革は、第二段階の「ウランフーの黒線¹⁶をえぐり出し、肅清する運動」に変わって行く。1967年4月に北京から派遣されて来た滕海清(Teng Haiqing)将軍が内モンゴルの党、政治、軍の全権を握り、11月に新しい権力機関——「内モンゴル自治区革命委員会」が樹立された。1968年が始ま

¹⁵ 1967年後半から、『内モンゴル日報』は全国に倣って自治区内に「毛沢東思想学習班」を設けるように呼びかけたことにより、各地において「幹部学習班」や「群衆学習班」などが至る所で設けられた。「学習班」において、ウランフーとその一味とされた人々が大いに批判された(啓之著『内蒙文革實録—〈民族分裂〉與〈挖肅〉運動』天行健出版社、2010:218-220)。

¹⁶ その「黒いライン」には、「ウランフーの勢力」、「ハーフンガーの勢力」、「元国民党傳作義と董其武」の三つの勢力があると決めつけられた[高樹華、程鐵軍著『内蒙文革風雷：一位造反派領袖的口述史』明鏡出版社、2007:330]。「ウランフーの黒いラインを抉り出し、肅清運動」において、「ハーフンガーの勢力」すなわち「内人党」は主な肅清対象となる。

ると、「えぐり出し、肅清する運動」は正式にスタートを切り、「内モンゴル人民革命党」¹⁷(略して、内人党)肅清は全内モンゴル自治区へと拡大される。その結果、トゥメド地域においても、「聯社」の問題が再び蒸し返され、メンバーたちは「内人党」員としてでっち上げられた。1968年1月に、滕海清らが率いる自治区の指導部が、「聯社」に対して大規模な討伐を決め、3月から「フフホト市連絡総部」がリードし、市内の百を超える組織が「聯社」に対して攻撃を開始した(高、2007:334)。「聯社」は、1967年5月に紅衛兵によって攻撃されてすでに有名無実となっていたが、その一年後には二度目の討伐を受けることになった。

したがって、「聯社」の支部とされたサーリチン大隊の「紅岩」は「反革命的な組織」として多くのメンバーが逮捕される。文書によれば、1968年初の時点で、榮孝忠と李政秀、それ以外に菓園の李文光(Li Wenguang)の3人がフフホト市の公安機関によって逮捕されて、自白を強要された。

1968年2月25日に、榮孝忠の問題は昇格されて「民族分裂主義者」として、バグシ公社の上級組織である旗内の「支左弁公室」¹⁸によって公安機関に送られた¹⁹(楊、阿日查、2013:73-74)。それから彼は1969年4月になるまでの一年以上に渡り自白を強いられ、繰り返し「罪」を自白させられた。

文書が語る榮孝忠の「民族分裂活動」に関する情報は、彼が逮捕される一年前の1967年3月頃、すでにサーリチン大隊の文革を指導する「サーリチン大隊紅色革命造反聯合総部」(以下は総部と略す)と「東風」によって集められ、1967年3月の11日から14日までの間に五回に渡って整理が行われ、『摘発資料(1-5)』が作成された。それに加え、「東風」のメンバー

¹⁷ 「内モンゴル人民革命党」は、1925年にコミンテルンとの支持を得て、万里の長城の近くにある町張家口で成立し、モンゴル民族の自決を目指したモンゴル人の政党である(フスレ2011:43-44)。党员には内モンゴルの東部出身者が多かった。同党は帝国主義を反対し、当時の内モンゴルを押さえていた軍閥と戦い、一時的に地下活動に転じることになる。1945年8月に日本の敗退を機に再び復活し、内モンゴルとモンゴル人民共和国との合併を目的とした活動を展開したが、中国共産党の圧力と陰謀で失敗し、1946年以降に活動停止となる(楊海英2009b:xxii)。しかし、文革中に、「内人党」はウランフーによって温存され、潜在的な活動を続けている極めて大きな地下組織としてでっち上げられ、全内モンゴル自治区規模の肅清運動が展開された(宋永毅編『毛沢東の文革大虐殺』2006:116)。

¹⁸ 毛沢東の決定により、1967年3月19日、中央軍事委員会が公文書を出して、軍隊の革命左派と言われる造反派を支持することを決め、「左派支持を施行する事務所」を設けた。これにより、全国ほとんども地域において、軍隊が陣を張って文革を支持することになる(卜偉華著『砸爛舊世界—文化大革命的動亂與浩劫』香港中文大学出版社、2008:428-433)。

¹⁹ 榮孝忠らが逮捕されてから何処で留置されたかについて、『档案』の中には言及がない。また、長期間に渡る強制的な自白がどのような手段をもって行われたかについても、まだ明らかになっていない。実際に、「内人党」への肅清運動において、このサーリチン村のモンゴル人全員が「内人党」とされ、犠牲者もいた(阿拉騰德力海1999:87、118)。榮孝忠を含めて、サーリチン村における被害情報を見つけ出すのも今後の課題の一つである。

やサーリチンの人々からの証言をとり、『証言 (1-36)』が準備された。

文書が語る栄孝忠の「罪状」は、1965年末から行われた「四清運動」²⁰中における「栄孝忠の罪悪に満ちた歴史」と文革中に行った「反革命的な民族分裂活動」という、二つに分類されて書かれた。以下はまず、栄孝忠の「罪悪に満ちた歴史」における二つの「罪状」を記述する。

「東風」のメンバーはまず、栄孝忠のサーリチン小学校の校長の座に就いた経緯について証言する（楊、阿日查、2013:51）。

栄孝忠は、トゥメド左旗文教局の成俊（Cheng Jun、ウラーンフーの黒い一味）に、良い仕事を見つけてくれるよう頼んで、1964年9月1日に、サーリチン小学校に転勤してきた。四清運動中の1966年2月に、バグシ地域で行われた「教師隊列の整とん訓練会議」において、栄は小組長を担当し、黒い祖父たるウラーンフーの指示に従い、大いに大漢民族主義に反対して、多数の漢人教師を批判し、ウラーンフーの黒い路線を積極的に実行した。こうして、大漢民族主義に反対する黒い嵐の中で、彼は汗馬の労を立てたことにより、ウラーンフーの代理人である任儒（Ren Ru、トゥメド旗委員会議長）によって、サーリチン小学校の校長に抜擢された。1967年3月30日、栗培英。

「前門飯店会議」において、ウラーンフーの多くの「誤り問題」の中で、大漢民族主義に反対したことが主に批判された。栄孝忠のサーリチン小学校の校長になったことは、彼が「四清運動」中にウラーンフーの手助けとなって、大漢民族主義に反対したことによるものとされた。

次に、「栄孝忠の罪悪に満ちた歴史」について「東風」のメンバーらが証言した。

(1)「極端に毛主席を敵視し、偉大な領袖を侮辱した」。

この「罪状」は、『摘発資料』において重点的に批判され、「東風」のメンバーである栗培英は1967年3月26日に、次のように証言した（楊、阿日查、2013:53）。

栄孝忠は学校で美術課程の担当者だった。彼の美術の才能は、とても有名なものである。しかし、1965年5月に、彼は毛主席像が描かれた表彰状を作った時に、我らの偉大な領袖毛主席を故意に酷く描いた。しかも党旗上の鎌と斧を毛主席の首に向いているように描き、さらに悪辣なことに毛主席像の両側に蒋介石（Jiang Jieshi）の肖像をも描いたのだ。この反革命分子は、いかに毛主席を敵視していることか。（証拠は旗の公

²⁰ 1963年から始まる政治、経済、組織、思想を清める運動。

安局とバグシ4926部隊に送った)(発見者はバグシ人民公社の教師董如義)

この「罪状」について榮孝忠は、1968年7月と10月に、「それは、表彰状の画面構図上の誤りで、毛主席に反対したことではない。ただし、革命的な群衆の批判は正しく、私は受け止めることができる」(楊、阿日查、2013:100)、「私の出身と履歴、そして仕事に対する態度などから調べて見てもわかるように、当時、私は毛主席に反対する考えは絶対になかった。」(同上:112-113)と、二回弁明している。

(2)、「毛沢東思想を敵視し、毛主席の著作を学ぶことに反対した」。

この「罪状」も重点的に批判され、次のように記述された(楊、阿日查、2013:47-48)。

トゥメド左旗において、ウラーンフー自らが指導した四清運動が全面的に展開した時期だった。旗内において大漢民族主義に反対して、モンゴル語を学ぶことを大いに提唱し、毛主席の著作を学ぶことに反対していた。榮孝忠も例外なく、サーリチン学校内において、ウラーンフーの反動路線を忠実に執行した。学校内で大いにモンゴル語を教え、先生たちも毎日モンゴル語を学び、学生たちに毎朝モンゴル語を学習させた。ある先生が反対意見を出したが、彼は、「モンゴル語を学ばなければ反革命的である。ウラーンフーは言った、モンゴル語を学ばないと、毛主席の著作を勉強したとしても無用で、中途半端な革命家である」と発言した。このように(彼と李政秀によって)、学校内において毛主席の著作を学ぶ時間帯が排除されたことにより、政治的な空気が非常に薄くなった。(下線は筆者)

下線が引かれた内容は、「前門飯店会議」においてウラーンフーが批判された内容とほぼ同じである。モンゴル語を学ぶことは、1965年にウラーンフーが出した政策の中の一つ「文化的基礎」における、「モンゴル人と漢人はお互いの言語を学び、交流を深めることにより、次第に共通の心理を生み出し、文化的な側面をもって民族団結に基礎を創る」、との政策だった[王樹盛、2007:378]。1966年初め、まずは自治区直屬機関とフフホト市内において、モンゴル文とモンゴル語を学ぶブームが起こり、迅速に全地域に広まった[同上:392]。

ウラーンフーが進めた政策により、榮孝忠が、サーリチン小学校においてモンゴル語の学習を推進したことも、「毛主席の著作を学ぶことに反対した」とされたのである。

3.2. 榮孝忠の文革中に犯した「罪」

続いて、文革中における榮孝忠の「罪」は、民族を分裂させたこととされた。以下は、その「罪状」に対する人々の証言と、彼が何度も繰り返し強制された自白の内容である。

(1)「ウランフーの黒い一味のための名誉回復を行った」。

これは榮孝忠が「万葉溝葉園事件」にどう関わったかについての摘発である。摘発に対しても、彭付正は、「公社の幹部が榮孝忠に対して、葉園の文革に関わらないように指示をしたが、彼は聞き入れなかった。これは党の指導を受けられないということであり、無政府主義の頂点に達していることだ」、「1966年12月27日、榮孝忠が女性たちに示唆し、王貴仲を殴ることを企んで、28日に実行した」（楊、阿日查、2013:54、56-57）と証言する。「罪状」に対して榮孝忠は1968年7月に、次のように述べた（楊、阿日查、2013:80）。

私は、文革中において自分の無産階級覚悟の低いのと、毛沢東思想に対する勉強の不足などが原因で、毛主席の偉大な戦略について行くことができず、階級の敵にだまされた。民族的感情が強かったことにより、重大な罪を犯した。現在、私は自己の罪悪行為について徹底的に自白する。

この自白の主旨は、「葉園事件」に対する責任は、あくまでも「無産階級覚悟の欠如と、毛沢東思想に対する勉強の不足」によるものとする。結局、このような自白は「総部」の審査に通らなかったが、次の自白（楊、阿日查、2013:86）において内容はかなり変わって来る。

私が、巴文科と王秉義（Wang Bingyi）の無実を訴えたことにより、巴文科は北京まで行き、反革命的な陳情活動を行った。葉園事件の発生後、李政秀に騙されて誤りのあるビラなどを作ってまき散らした。私は、李政秀の指示の下で、葉園の革命的な幹部の趙華と革命的な群衆の王貴仲に打撃を与えた。

榮孝忠は、「ウランフーの黒い一味」の無実を訴えた「罪」を認識したが、今度は全ての活動の主謀者は李政秀であるように自白している。これも駄目だったようで、1968年11月12日に、榮孝忠はさらに事件発生の経緯を詳しく述べた上で、次のように自白する（楊、阿日查、2013:113-115）。

私は罪のある人間だ。葉園事件において、私たちは民族的な感情を表した。また、ウランフーが悪かったとしても、モンゴル人全てが悪いとは限らない、と考えていた。葉園の権力者は数人の一般群衆をウランフーの一味として批判し、巴文科に対して武闘を行った。私は、葉園は資産階級の反動路線を執行しているという誤った思想のもとで、黒い一味の巴文科と王秉義を保護し、悪事の張本人を演じた。革命的な幹部の趙華と反ウランフーの強い戦士の王貴仲に深刻な打撃を与えた。

菓園事件を起こした原因の源は、「民族的な感情をもち、民族分裂を行った栄孝忠本人にある」と認めさせたのである。これにより「菓園事件」に関する自白はようやく「総部」の審査に通った。

(2)「革命的な組織に打撃を与え、革命的な群衆を迫害した」。

これはサーリチン大隊内において、栄孝忠らがどのように「東風」と対立していたかについての摘発である。栄孝忠が「東風」の活動に反対していたことについて、「東風」のメンバーの栄恩録が、1967年3月27日に次のように証言した(楊、阿日查、2013:67)。

1967年2月27日、我が「東風戦闘隊」は、四類分子の六人(雲毛、吉力更、雲虎撓、李小娃、王永、劉福礼)に対して批判闘争を行っていた。栄孝忠は敵と合流し、反革命分子李小娃の息子の李文計と雲威威(Yun Weiwei)を会場に派遣して騒動を起こし、四類分子を庇護した。四類分子はこれを見て威張り、「東風戦闘隊は匪賊のやり方を取っている」と我らを罵倒した。

次の1967年3月28日に、栗培英も証言した(同上:64)。

栄孝忠は、1967年1月23日に、「東風戦闘隊に対して猛烈に火ぶたを切る」、と題した大字報を出して、「東風戦闘隊は反革命的な組織である」と書くなど、さまざま手段をもって、革命的な組織と革命的な群衆を圧制した。

摘発と証言に対して、栄孝忠は1968年7月に、次のように自白した(楊、阿日查、2013:86-87)。

「紅岩」の悪いボスである私は、ウラーンフーの流毒の影響によって民族的な感情が強まり、文革はもっぱら少数民族を圧迫している、と考えた。私のこのような誤った考え方は、戦闘隊のメンバーにも悪い影響を与えた。結果的に、サーリチン村と西梁村の群衆の間に深刻な対立が生じ、派閥闘争が起こった。また、サーリチンの人が西梁に行つて宋国亮を殴るなどの事件も起こった。以上の事実から見れば、派閥対立から民族を分裂させることに至った。このように、私は西梁の革命的群衆に打撃を与え、重大な罪を犯したのだ。

また、1969年2月5日に、栄孝忠は「東風」との対立において、そのメンバーを批判したことは、「矛先を対立側(「東風」-筆者)に向けて、主に李政秀の煽動のもとで、彼と一緒に

に悪事を執行したのは、私の重大な罪である」と、二度自白する。

(3)、「聯社」のメンバーとしての自白

続いて、榮孝忠が「聯社」に参加したことも重点的に批判され、自白が繰り返された。

大隊幹部で、「東風」のメンバーである栗留在は1967年3月30日に、「榮孝忠らは、1967年の正月に、聯社の宣伝大字報を大量に印刷し、ウランフーは劉少奇と鄧小平の反動路線の被害者だと宣伝した」(楊、阿日查、2013:60)と証言する。

この証言に対して、榮孝忠は1968年7月14日に、次のように供述した(楊、阿日查、2013:77-78)。

その宣伝ビラは、サーリチンの雲素成 (Yun Sucheng) が印刷し、私の家にも持ってきたが、私はそれを焼き払って処分した。私は当時、雲素成のウランフーの無実を訴えたことに反対せず、逆にその証拠を処分したことは、彼を庇ったことだった。

さらに、1968年11月12日に、「その宣伝ビラは私の手で配布したことはないが、配ろうと思ったことと、それを焼き払ったことは、私の罪だ」(同上:121)、と自白する。

証言は続く。榮孝忠がフフホト市へ逃走して、「聯社新常務委員会」に加入したことについて、彭付正と栗留在は1968年3月28日(同上:72)に、次のように証言した。

榮孝忠は1967年4月7日に、罪を恐れて逃走した。フフホト市に行き、聯社に属する妖怪変化や敗残の将兵らと合流し、改めて態勢を立て直そうとした。聯社の新常務委員会を成立させ、委員の一人に着任した(本人が大隊で自白した)。それにより、李威懷(Li Weihuai)を北京まで派遣して陳情を行わせ、聯社とウランフーの無実を訴えた。

何回にも渡る証言の繰り返しによって、「紅岩」の隊長李威懷が北京まで行ってウランフーと「聯社」の無実を訴えたことなど、すべてが榮孝忠の示唆によるものとされた。

証言に対して、榮孝忠は1968年11月12日に、次のように自白する(同上:113)。

私は罪のある人間だ。ウランフーという古い反革命分子の流毒を受け、反革命的な組織である「聯社」に騙されて敵の側に立った。毛主席の革命路線を離れ、ウランフーの名誉を回復しようと、悪質な活動を行い、革命幹部と反ウランフーの強い戦士らに深刻な打撃を与えた。モンゴル人と漢人の下層中農の間で民族分裂を行い、毛主席の革命路線を破壊し、滔天の罪を犯した。現在、私は誠実に自分の罪を認め、広範な群衆からの批判を受け止め、自分の魂に触れて、非を改めることこそ唯一の正しい道で

あると考えている。このために、自分の一切の罪悪を自白する決心をした。革命的群衆からの一切の批判を受け止め、革命的な群衆と革命委員会のいかなる処置をも受け入れる。

このように、榮孝忠に対する強制的な自白の繰り返しは一年間続き、ついにその「罪」を認めさせたのである。しかし、彼を待っていたのは意外な結末だった。彼は「人民党」員という濡れ衣を着せられる結果となる。

3.3. 結末—二重の「罪」

1969年に入ると、内モンゴルの文革は、「ウラーンフー反党叛国集団」のメンバーを抉り出すキャンペーンから「内人党」員をえぐり出し肅清する（挖肅-wasu）運動へと展開していった。このキャンペーンでは、モンゴル人「民族分裂主義者」を抉り出し肅清する運動を最高潮まで推し進めた。

榮孝忠は一年以上に渡って度重なる強制的な自白において、「罪状の摘発」とそれに伴う「証言」にしたがって繰り返し「自白」し続けたが、彼は、「ウラーンフーの一味」の上に「内人党」員へと変化して行き、二重の「罪」を着せられることになる。

榮孝忠は逮捕されてから一年後の1969年2月5日に、「バグシ人民公社革命委員会」により、「榮孝忠の処分に関する決定」が下された。「決定」には、榮孝忠に与えられた五つの「罪」が書き込まれた（楊、阿日查、2013:128）。

無産階級文化大革命運動中、革命的群衆の摘発と確実な証拠により、当の榮孝忠が関係するのは、

- 1.偉大な領袖毛主席を悪辣に攻撃し、共産党と最後まで血戦しようとした。
- 2.聯社「新常務委員」、「67119紅岩」の悪いボスで、民族の情緒を煽って民族分裂を挑発した。何度も武闘事件を起こし、革命群衆を鎮圧した。革命的な幹部に打撃を与え、無産階級の政権を奪い、ウラーンフーが行うクーデターに犬馬の労を尽くそうとした。
- 3.「人民党」サーリチン支部委員で、宣伝と連絡の役員をつとめた。
- 4.四清運動と文革中に、反革命分子である岳父に対して名誉回復を行った。
- 5.罪悪な事実を自白せず、広範な群衆に引きずり出されてから、罪を恐れて三回逃走した。今回の内人党に関する自白においても頑強に抵抗して否認し、1月30日にまた逃走した。

榮孝忠は、「ウラーンフーの黒い一味」として批判されてきたが、思いがけないことに、

「人民党サーリチン支部委員で、宣伝と連絡の役員」というぬれ衣を着せられたのである。すなわち、彼は「ウランフー反党叛国集団」と「内入党」員という二つの「民族分裂集団」に関連付けられ、そのメンバーとされたのである。そして、栄孝忠は「現行反革命分子」として公職を解任され、農村において労働改造を行うことになった²¹。

述べてきた通り、栄孝忠の「罪状」への摘発と「罪状」に対する証言の繰り返し、そしてイデオロギーの統制と強制的な自白という手法によって、栄孝忠にその「罪」を認めさせたのである。

栄孝忠への自白の強要は、「栄孝忠の処分に関する決定」が下された1969年2月の時点では終わらなかった。69年4月11日に、栄孝忠は、「私の反党叛社会主義の言論に関して」と題した自白書を書く。さらに、4月13日に、「私は今、階級の敵にして内入党の骨幹である雲圪坦（Yun Gedan）が雲文厚（Yun Wenhou）に指示して、革命的な彭付正を殺害しようとしたことを告発する」（楊、阿日查、2013:128-130）と、同じ「紅岩」のメンバーだった雲圪坦を摘発した。雲圪坦はサーリチン生産隊の小隊長で、雲文厚とともに「紅岩」のメンバーだった。栄孝忠は自分のすべての「罪状」を自白しただけではなく、自分の仲間まで摘発させなければならなかったのである。

おわりに

ここまで、栄孝忠の事例を通してサーリチン大隊の文革運動を分析した。文革初期に、トゥメド左旗のモンゴル人たちによって組織された「聯社」という大衆組織が、自治区の首府フフホト市やトゥメド左旗だけではなく、基層の人民公社と生産大隊にまで広がり、ウランフーの無実と少数民族の利益を守ることを訴えた。これは、文革初期においてトゥメド・モンゴル人たちが、文革に対して行った一種の抵抗だったと言えるであろう。これに互応するかたちで、サーリチン大隊のモンゴル人たちも、民族の利益を守るような活動を展開した。サーリチン大隊のモンゴル人たちにとって、文革運動は大漢民族主義による少数民族への圧迫であった。彼らのそうした認識は「聯社」の主張と一致していた。彼らは、人民公社内の他の村のモンゴル人たちと連携し合って、多数派の漢人農民たちの批判に対抗した。

しかし、「聯社」の敗北に伴い、栄孝忠を始めとするサーリチン大隊のモンゴル人たちも、紅衛兵や漢人農民の批判を受け、「ウランフーの一味」とされる。さらに、文革運動に積

²¹ この時期に、バグシ人民公社サーリチン大隊で、モンゴル人が「人民党」員として殺害に遭った事例について、阿拉騰徳力海氏の著作に記録されている〔阿拉騰徳力海 1999：87、118〕。ただし、同事件についての資料は手に入らないため、いまだに研究が進まない状況にある。栄孝忠の場合は「人民党」員殺害の事例比べてはるかに幸運に恵まれたと言えるであろう。

極的に参加した榮孝忠とその仲間たちは、「人民党」員という、もう一つの「罪」が加算され、「民族分裂罪」で打倒された。次第に、「民族分裂主義者」とされた人への処罰に対する判断は旗の政府機関によって決められ、さらに上級機関である自治区の公安機関によって最終的な処罰が下されたのである。

榮孝忠の事例から分かるように、「民族分裂主義者」として逮捕されたモンゴル人たちは、長期間に渡る自白の強要を経て、彼らに下された数々の「罪」を認めざるを得なかった。また、彼らに対する刑罰は、上層機関の統制を受けていたことから、サーリチン大隊の文革は、旗や首府の文革運動と直接的な繋がりをもっており、その動向は上層部の動きによって左右されたことがまず明らかになったのである。

文革初期において、サーリチン大隊だけではなく、万家溝菓園、バグシ人民公社を含めて、トゥメド旗内における多くの地域(例えば、タブンアイル人民公社、鉄帽人民公社)ではウランフーをめぐって、モンゴル人と漢人農民の間で対立が生じ、次第に民族間の対立へと拡大していった。バグシ人民公社内において、少数派のモンゴル人たちは場合によってお互いに連携を取りながら、漢人農民や紅衛兵たちの攻撃に対抗した。

ここで、トゥメド左旗の基層において、ウランフーをめぐるとの対立が民族間対立を引き起こしたことが分かる。そして、生産大隊ないし人民公社内で生じた民族間対立は、「聯社」という大衆組織との繋がりにより、旗または首府レベルの文革運動とも関連していったことが明らかになったのである。

参考文献

1. 史料

楊海英、阿日查(2013)“榮孝忠的档案—材料登記・1967年～1969年” 静岡大学編『人文論集』第64号の1・2(合併号)、pp.21-130。

“〈聯社〉為烏蘭夫翻案罪責難逃:〈聯社〉調査組(呼三司)” —楊海英(2011)、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料(3) —打倒ウランフー』風響社(収録)、pp.892-893。

楊海英篇(2011a)、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料(3) —打倒ウランフー(烏蘭夫)』風響社。

2. 資料

漢文

阿拉騰德力海(1999)、『挖肅災難實錄』私家版。

卜偉華(2008)、『砸爛舊世界—文化大革命的動亂與浩劫』香港中文大学出版社。

- 高皋 嚴家其 (1986)、『“文化大革命”十年史』天津人民出版社。
- 高樹華 程鉄軍 (2007)、『内蒙文革風雷一位造反派領袖的口述史』明鏡出版社。
- 郝維民 (1991)、『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社。
- 金春明、席宣 (1996)、『文化大革命簡史』中共党史出版社。
- 季羨林 (2011)、『牛棚雜憶』武漢出版社。
- 啓之 (2010)、『内蒙文革實録—〈民族分裂〉與〈挖肅〉運動』天行健出版社。
- 宋永毅 孫大進 (1997)、『文化大革命和它的異端思潮』田園書屋 (香港)。
- 閔岡 祝東力 (1995)、『康生与“内人党”冤案』中共中央党校出版社。
- 土默特左旗『土默特誌』編纂委員会 (1987)、『土默特旗誌』内蒙古人民出版社。
- 韋君宜 (2012)、『思痛録』人民文学出版社。
- 文津 (1992)、『中国左禍』北京朝華出版社。
- 王樹盛 (2007)、『烏蘭夫伝』中央文献出版社。
- 周倫佐 (2011)、『「文革」造反派的真相』田園書屋
- 張化 蘇采青 (1994)、『回首“文革”—中国十年文革分析與思考』(上、下) 中共党史出版社。
- 張石山 (2010) 『拷問經典—未来世紀的文革考古索引』秀威資訊科学。

日本語

- 宋永毅 編 松田州二 訳 (2006)、『毛沢東の文革大虐殺』原書房。
- 星野昌裕 (2003)、“内モンゴルの文化大革命とその現代的意味” 国分良成篇『中国文化大革命再論』(慶応義塾大学出版会、2003) pp.323-346。
- ボルジギン・フスレ (2011)、『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策 (1945～1949)：民族主義運動と国家建設との相克』風響社。
- 福岡愛子 (2008)、『文化大革命の記憶と忘却』新曜社。
- (2014)、『日本人の文革認識—歴史的転換をめぐる〈翻身〉』新曜社。
- 毛里和子、国分良成 (1994)『原典中国現代史-政治 (第1巻)』岩波書店。
- 毛里和子 (1998)、『周縁からの中国—民族問題と国家』東京大学出版会。
- 楊海英 (2009b)、『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上) 岩波書店。
- (2013b)、『中国とモンゴルのはざま—ウランフーの実らなかった民族自決の夢』岩波書店。

付記：本研究ノートは、本誌の規定にもとづき、査読をおこなった。